

# 経営リースの取組事例

## 「鹿児島県内における畜産環境リース事例」

鹿児島県農政部畜産課 祝 正樹

### ■鹿児島県大隅地域の概要

大隅地域は、県の北東部に位置する曾於市（旧大隅町、旧財部町、末吉町）、志布志市（旧松山町、旧志布志町、旧有明町）並びに曾於郡大崎町からなり、南に鹿屋市、西は霧島市及び北は宮崎県都城市、串間市と接し、東は志布志湾に開けています。



図1 地域図

年間平均気温は16℃内外、年間降水量2,200mm前後であり、県下でも日照時間が長い。

畑地の大部分はシラス台地上にあって、20ha以上の集団化をなし、機械化を推進する上で恵まれた条件にあり、畑かん事業の導入、大規模ほ場整備などにより畑地を活かした農業の発展が期待されています。

地域の農家戸数は、11,125戸で県全体の12.5%を占め、うち畜産農家戸数は4,285戸となっています。

平成17年度の農業産出額は725億円で、うち畜産部門492億円（67.9%）、耕種部門226億円（31.2%）となっています。作物別では、1位：豚、2位：肉用牛、3位：ブロイラー、鶏卵、さつまいも、茶、米、生乳、葉たばこの順位になっています。

養豚、養鶏部門は大型の農場が多く、県単や国庫事業等を利用したふん尿処理施設整備を進めてきており、家畜排せつ物の適正な処理や有効利用を図り、地域社会環境と調和のとれた畜産経営を目指しています。

一方、肉用牛は、農家戸数が多く、また飼養規模に大きな差があることなどから、肥育などの大規模農場では比較的堆肥舎等の整備は進んでいますが、飼料畑を持つ繁殖の中～小規模経営体では、自作地に野積みなどの状態が多く、不適切な処理及び管理がみられました。このようななか、「家畜排せつ物法」が平成11年に施行され、管理基準の対象農家に対して啓発を行いながら、補助事業等の紹介をおこなってきました。

	S60	H5	H10	H18
繁殖戸数	10610	8010	5940	3900
成雌牛頭数	34700	37400	32000	28600
肥育牛頭数	8130	9460	13200	17600
成雌20頭以上戸数	25	93	170	260
成雌50頭以上戸数				62

表1 大隅地域の肉用牛飼養戸数・頭数の推移

このことから、当地域では1/2補助付き畜産環境リース事業を利用した繁殖経営体の堆肥化処理施設の整備が急速に進められました。

年度	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18
件数	12	12	11	3	6	17	9	12

表2 管内のリース事業の実施状況

そこで今回は、当大隅支所管内の曾於市末吉町で整備された事例について1件紹介いたします。

## ■須田一郎・あつ子ご夫妻の事例 これまでの経緯

曾於市末吉町で60頭の肉用繁殖牛を飼養する須田ご夫妻は、夫婦仲良く、長く経営を続けていきたい思いから、飼養管理の効率化を最優先に畜舎、機械の整備を行ってきました。

夫の一郎さんは、昭和44年に県立畜産講習所（現在は県立農業大学校）を卒業後、就農されました。当時はご両親が肉用牛を数頭飼っており、本人は曾於郡人工授精師会へ入会し畜産人として第1歩を踏み出されました。現在では、授精師会の中でも授精頭数は多い方で、年間800頭余りに授精を行っており、肉用牛改良面にも詳しく、地域雌牛の能力向上に第一線で頑張っておられます。

一方、妻のあつ子さんは、昼間に1人雇用するものの、その細身の姿からは想像もできないバイタリティで積極的に牛の管理に取り組み、ご両親から平成4年に譲られた経営を18頭まで増やしてきました。

しかし、平成12年に口蹄疫が発生し、翌年にはBSEが発生しました。畜産に関係する者なら多くの方が、畜産業の将来を危惧したものでした。



写真1 須田一郎・あつ子夫妻

## ■パドック型畜舎

このような状況で、平成14年に畜舎建設事業（旧末吉町単独事業）に取り組み、現在の規模の牛舎を整備されました。『将来、子牛価格が上がる確信があったわけではない。』と当時を振り返っておられますが、

大きな転機になったことは間違いありません。

畜舎は、地域で『パドック型畜舎』と呼ばれる採光性の屋根材を利用したフリーバーン畜舎です。この畜舎は、従来の外パドックの屋根無し部分まで屋根を掛け、1頭あたりの牛床面積を10㎡程度確保し、さらに屋根材として採光性のあるポリカーボネートを使用することで、敷き料を乾燥させ、床替えの回数を少なくすることができます。さらに換気扇等を利用することで、その効果は上がります。

これにより、床替えの労力軽減と毎日の床替え作業時間を短縮することができ、牛の管理に向ける時間が増えました。



写真2 パドック型畜舎1

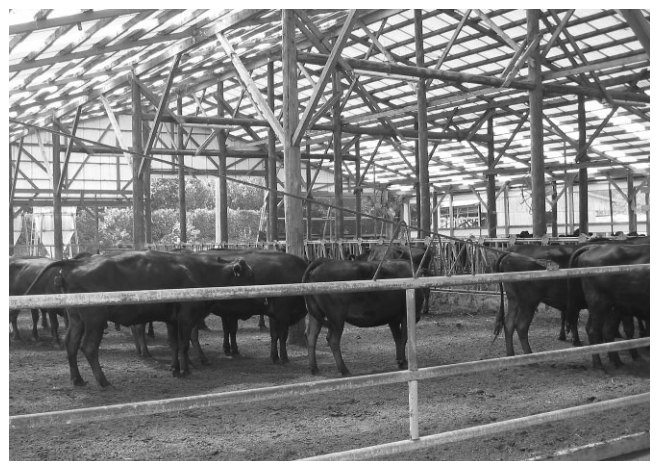


写真3 パドック型畜舎2

## ■粗飼料確保

当地域は比較的粗飼料自給率が高く、規模が100頭を越えても100%自給飼料で対応している経営体もあります。須田さんは、急激に頭数が増えてきたため、畑の確保が必要でしたが、現在では粗飼料はほぼ100%を自給可能であり、8haの圃場で夏はローズグ



ラス、冬はイタリアンライグラスを生産しています。全てロールラップサイレージに調整し、年間給与しています。昨年も収量が多かったことから、粗飼料の手当は十分できています。今年の夏作も順調で、昨年並みの収量が期待されています。

## ■子牛育成

子牛は、2日で母牛と離して、人工哺育に向けています。代用乳を最大800gで実施していますが、今後は鹿児島県肉用牛振興協議会で作成した人工哺育マニュアルで示されている代用乳1,000g体制に取り組んでいこうと、積極的です。

取材に行った当日は、梅雨明けの猛暑日が何日も続いた日でした。「こんにちは！」と声をかけると、分娩舎の方から「おーい」と声が返ってきました。分娩だな？と思い、そっと牛舎をのぞき込むと、今生まれたばかりの子牛と子牛の体を大事に舐める母牛がいました。生まれた子牛は、一郎さんが移植したET産子で、分娩予定日を20日程持ち越していたらしく心配していたそうです。「金幸の雄だよ」まだ起きあがれない子牛は、既に数ヶ月後を期待されているようでした。このように、一郎さんは胚移植の資格も持っており、年間60頭程度の移植も行っています。

畜舎整備した平成14年頃はET産子の雌はほとんど自家保留し、その後もETを利用し増頭を図られました。



写真4 生まれた子牛(金幸)と母牛と一郎さん

## ■1/2補助付き畜産環境リース事業

50頭経営が順調に回りだしたため、念願の堆肥舎

を建設することにしました。これまでは、シート被覆して簡易対応してきましたが、周辺への気遣いや、畜舎周辺の環境もきれいにしておきたいという気持ちから、堆肥舎整備を決心し、JAそお鹿児島に相談されたそうです。この年、JAそお鹿児島では5件の肉用牛経営の堆肥舎整備を行っています。



写真5 1/2補助付きリース事業で整備した堆肥舎

## ■堆肥生産と利用

生産した堆肥は、全量を圃場散布していますが、せっかく作るなら良い堆肥を作りたいということで、堆肥化に必要な条件や容積重、切り返し回数などを聞いたりしながら、試行錯誤してこられました。



写真6 1/2補助付きリース事業で整備した堆肥舎

19年3月に県畜産協会が行っている環境指導事業を受けて、協会職員から、水分調整がうまくできているので、切り返し回数を増やしてという助言を頂き、早速取り組まれました。以前より、大きな玉が少なくなり、ハンドリングが良くなりました。

施設を整備できたことで、ふん尿の置き場や周辺へ

---

の気遣いなどに気を煩わされることがなくなり、牛の生産に一生懸命になれたそうです。今一番考えていることは、子牛の事故をできる限りゼロにすることだそうです。

## ■最後に

家畜排せつ物の処理は、畜産業を営む上で、投資額が大きいこと、所得に直接つながらないなどの理由で、なかなか進まず、大きな課題といわれています。このような中で、1/2補助付き畜産環境リース事業も平成9年度から継続実施され、その他の環境対策事

業と合わせて、多くの施設が整備され、畜産環境の改善に貢献してきました。

今後の畜産業は、平成17年に「環境と調和のとれた農業生産活動規範」が示され、さらに地域環境に十分配慮した生産が求められてきています。今回紹介した須田夫妻のように、過度な投資にならないように必要な施設をきっちり整備することで、家畜の飼養管理に集中でき、ひいては所得向上へとつながるのではないのでしょうか。今後も施設の整備を進め、更に活気あふれる畜産鹿児島になるよう活動していこうと考えています。

